セミナー

現代における危機と再生

講　師の哲学者・内山　節さん

日　時　2011年10月6日(木)

会　場　高知共済会館

目　次

講　演　「現代における危機と再生」・・・・・・・・・・・・・・・・・1
講師　内山　節さん（哲学者）

参加者からの質問・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・30

（司会者）

皆さん、こんばんは。

まだ、おいでる方もあろうかと思いますが、定刻になりましたので、ただ今から高知県自治研究センター主催のセミナーを開催したいと思います。

10月に入り、日もだいぶ短くなりましたが、今日は大変暑い一日で、キンモクセイが香っているのにまだセミが鳴いているという、何か変な昼間の感じでしたが、早速始めていきたいと思います。

本日は、哲学者である内山節さんに講師として来高していただきました。今年の3月1日にも内山さんにおいでていただきまして、この場所でセミナーを開催したところです。そのときにいらっしゃった方もいると思いますが、その10日後に、皆さんご存知のとおり、東日本大震災が発生し、地震と津波という一方での天災、そして原発事故という、もう一方での人災という大変な震災が発生したわけです。このことは私たち日本人にとって、これからのこの国の在り方、暮らし方、そして価値観の転換といったことを、否応なく突き付けられた震災だったと思っております。

そして、そのようなことを語れる、この日本の知識人の数少ない一人である内山さんに今回再度来ていただいたわけですが3.11以降、内山さんは大変お忙しい毎日を送られており、何とか今回ご無理をお願いして、高知にまた来ていただいたということでございます。

高知県でも、南海大地震が今後50年の間に、80%から90%の確率で起こるだろうと言われています。今のままの価値観を転換することもなく、巨大システム依存のままでいいのか。あるいは、地域でのつながりが寸断された暮らし方のままでいいのか等々、今、まさに私たち一人ひとりの在り方が問い直される、そういった時期に来ているのだろうと思います。

そういう問題点も含めて、本日、内山さんにお話をいただきたいと思います。

それでは内山先生、よろしくお願いします。

内山　節さん講演「現代における危機と再生」

東日本大震災をめぐって

ご紹介いただきました内山です。

ざっくばらんに、今、私の考えていることなどをお話できればと思っています。

今のお話にもあったように地震と津波だけでしたら、特に三陸地域について言うと、大体100年に一遍ぐらい大きな津波が来ているという地域です。地域にはいろいろな伝承があり、もう少し伝承をしっかり守っていれば、ここまで大きな被害にならなかったということでもあります。

ただ、江戸時代の終わりや明治の初めというのは、日本の人口が3千万人ぐらいでしたから、それから言うと、今は4倍ぐらいになっています。今、私たちは地方に行くと「過疎化」と言っていますけれども、江戸期や明治の初期のころと比べると、だいぶ人口は増えています。ですから三陸地域についても、歴史から見ていくと、津波が来て、人々が高台に引っ越

してというようなことを繰り返してきたのですが、だんだん人口が増えてくると下の方に住むようになっていき、そういうあたりでだんだん、伝承もしっかり伝えられなくなったということでもあります。

ですから、三陸には本当に水が来る所までが分かるように、そこに仏様を祭るとか、地域によっては横に道を造ってあげて、その道の下に家を造ってはいけないとか、いろいろな伝承を残してきた地域もあります。

ところがそういう問題と、もう1つ原発事故という、我々からすると全く初めての出来事と言ってもいいし、世界的に見ればチェルノブイリ、アメリカのスリーマイル島と、2回ほどありましたけれども、そういう大きな出来事が起きてしまいました。特に原発の問題になりますと、我々がつくってきた文明自体が私たちの文明を壊していくという現象を生んでしまって、これからこの問題とどう向き合っていったらいいか。これは、かなり重要なことになってくるのだろうという気がいたします。

私もそれ以降、日本の中を少し歩いていると、大体愛知県ぐらいから西に来ると、一般的な意味での危機感もだいぶ薄いようです。ところが、関東地方あたりから北の方に行きますと、これはだいぶ深刻な問題になっています。東京あたりでも、もちろんセシウムの濃度というのは若干増えています。慌てるほどでもないのですが、一応平常時と比べれば倍ぐらいになっているという状態です。放射性物質というのは既に報道されているとおり、非常に困ったことに、ここは割と大丈夫でも、そこに行ったらちょっと駄目とか、そういう問題が起きてしまうために、正確にどこが危なくてどこが大丈夫なのかの判断が難しい。高濃度に汚染されていれば全部危ないと言いますけれども、低濃度の場合でも、非常にまだら模様になってくるためによく分からないという問題もあります。

それに、世界的にそう何度も経験がありませんから、きちっとしたデータがないので、どのぐらい放射性物質を吸い込んだら、どういう結果が出てくるのかというのがよく分からないというのです。そういう問題がたくさん出てきています。

これから、お米農家の方も結構大変なわけですけれども、一応、今分かっていることというのは、お米についてはあまり入りにくい。というのは、稲わらにかなり残留してしまって、実の方にあまり行かない。もみ殻を取ってしまうと、なお行かない。さらに精米してしまうと、さらに行かないということなのです。もちろん、高濃度の汚染地域のものはどうにもなりませんけれども、あまり入りにくいということが分かってきているのですが、ただ毎日食べるものですから、たとえわずかずつでもいいのかという、問題が起きてきています。

また、本当に困った問題なのは、例えば私は、東京と群馬県の上野村という山間地の二重生活をしているのですが、上野村は、0.15マイクロシーベルトぐらいの放射線量です。東京にいるときには、後楽園の近くのところにいるのですが、当初もっと高くて、0.2から0.3マイクロシーベルトぐらいありました。今はどうなっているかというと、そのあたりは0.06から0.08マイクロシーベルトぐらいの感じになってきています。それは一体なぜかというと、自然がないからなのです。つまり、コンクリート、アスファルトしかない。そうすると、雨が降るたびに流されてしまい、結果としては除染ということが行なわれてしまいます。ですから、土がない所ほど濃度が低くなっていくという現象を生んでしまっています。

ところが、私が住んでいる近くでも、小石川植物園になりますと比較的高い濃度、0.2 マイクロシーベルトぐらいの数値がずっと残っています。

私のいる上野村になりますと、山また山で自然が豊かですから、それがすべての所でそうなのです。ということは、一遍入ったセシウムは減っていかないということになってしまっているので、非常に考えなければいけないという感じです。

また、かなり細かく村でも調べているのですが、うちの村は漢方薬の原料を出している家が何軒かあります。朴の木（ほおのき）については、皮を原料として出荷するのですが、朴の木の皮については放射性濃度が高いので、これについては売れないということになっています。そして、よく胃腸薬に使うキハダについては、外側の皮をはがして、内側の皮を漢方薬の原料として使う。そうすると、これはセシウムが出てきてないので、まあいいかなという感じになっています。そんなふうになっていて、多分細かく調べていくと、またまだら模様が出てきてしまいます。そうすると、うちの村の農産物で一番大きいキノコについても、村で原料から出荷までのいわば一貫生産体制を持っていますが、その結果として、村の木の外側をむかないで使った菌床からセシウムが出ました。これは、国の基準値は超えておらずはるかに低いのですが、ただ、「上野村のキノコからセシウム」などと報道をされてしまいますと、これは全く駄目になってしまいます。ですから、内側の部分だけを原木に使っていくやり方を取ると、まあまあ大丈夫とか。だから、私の所は相当離れているのですが、それでもそういう問題があります。今、天然のキノコの最中なのですけれども、ちょっと食べるのには勇気が要るといいますか、そういうことなので、かなりの人が今年は放棄という感じになっています。

うちの方も今、シカやイノシシ、サルなどで大変困っている地域です。シカとイノシシについては、あとひと月ほどしますと狩猟が解禁されます。村の人間としてはたくさん撃ってほしいのですが、大体去年あたりで、シカが 400 頭とイノシシが 150 頭ぐらい、うちの村が撃っている数です。ただ、今年はその野生動物の肉を食べるかどうかという問題があって、窪地などの雨が集まる所に落ちているドングリとかを食べていると、やっぱり少し濃度が濃いのだろうということが想定されます。恐らく国の基準値で言えば、大丈夫という話でしょうけれども、放射能に関しては風評被害というのが存在しないというふうに言った方がいいわけです。なぜかというと、分からないという問題がある以上、そこの基準を厳しく見る人がいても当然だし、「まあ、国が言っているのならいいでしょう」と言う人がいて

もまたいいですけれども、分からない問題と付き合わなければいけません。そうすると、国が大丈夫だからといって、これは風評被害ですと言って開き直るわけにいかないという問題があるためです。これは恐らく関東地域、南東北はなおさらですが、すべてが非常に困っているということになってきています。

さらに、放射性物質の種類によって違うのですが、今回、一番出てきたのはセシウムです。直後はヨウ素 131 などもありましたが、あれは半減期が早いので、現状ではもう計測できないと言ってもいいのですけども。セシウムというのは、地面に入った場合に、水と一緒に木がくみ上げるようになります。くみ上げた場合に、ストローキングについては木の導管を通って、木で言うと形成層の部分を通って、葉っぱに行きます。そして、葉っぱから落葉して、永遠に循環しているという感じになってしまうわけです。そんな感じになるというのは大体分かっているのですが、この辺はチェルノブイリのときに随分細かい研究がなされているのです。セシウムについては、導管を通って上がって木の芯まで入るというのが分かっています。そうすると、特に福島の濃度の濃い地域になってくると、木を切って使うことができない。燃やしても出ますし、もちろん灰にも残りますし、消えないという問題があるために、木材をどうするのかというと倒れて腐っても、30 年で半減しているだけの話ですから、倍ぐらいだったら、30 年で半分で、まあ何とかいいかということが言えるわけです。10 倍、20 倍になってきますと、もうこれは 100 年、200 年という単位でしか、国の安全基準までもいかないという問題が起きてしまうので、どうするのでしょうねという感じになっています。

ですから、そういう中で判断ができないだけに大変なのですが、人々も、これはもう駄目だと。だから、もう社会を抜本的に変えなければいけないという、そういう気持ちはかなり高まっています。本当に、愛知県あたりを境にして随分違うなという気がしているのですが、関東や東北に行きますと若い人たちにも、かなりこの社会を何とか抜本的に変えないとまずいという機運が随分高くなってきている感じです。

また、現状というのは、今回の震災の問題だけではなくて、世界そのものが完全に行き詰まってきたという中で震災が起きているということでもあります。

経済学者マルサスの「人口論」について

今、ギリシャで「ギリシャ危機」などということがよく報じられていますけれども、だんだん手の打ち様がなくなってきています。多分、ギリシャはデフォルトという形で、債務不履行宣言をしてやるしかないだろうと思われていて、ただその場合に、EU から出るのか、EU の中に残るのかという問題もあります。つまり、ドイツなどで起きている批判というのは、ギリシャを助けるためにドイツの税金が使われるということに対する国民の反発が相当激しいわけです。だから、自分たちのお金をギリシャ救済に使ってほしくないというふうな、世論調査をするとそれが 3 分の 2 ぐらい占めているのです。ところが、EU としては、そうとばかりも言っていられない。なぜかというと、あそこは昔、「ドラクマ」という通貨でしたから、ギリシャに EU から出てもらって、またドラクマにでも戻ってもらって、それ

で一方的にデフォルトしてもらって処理してしまおうということをやった場合、次にイタリア、スペイン、ポルトガル、アイルランド、このあたりが連鎖してくるというのは大体分かっています。次々にEUから出てもらって、ユーロから出てもらってと言った方がいいのかもしれませんが、同じようなことをしていくことになってしまいます。

ところが、このあたりの国債を大量に持っているのが、ドイツの銀行でありフランスの銀行であったりするわけですから、そうなると今度、ドイツ、フランス、イギリスの金融機関が全く持たないということが起きてしまって、どのみち連鎖する。だから、その決断もできない。それで、ユーロの中に残しておきながら何かやっているわけですが、この方法でうまくいくとも誰も思っていないという、事態はそういう感じになってきてしまいました。

だから、そうこうしているうちにだんだん手遅れ的な雰囲気になってきていて、今、ギリシャ国債の金利が年利80%ぐらいまで来ています。つまり、金利8割をつけないと誰も買わない国債です。大体、国債というのは20%までいってしまうともう駄目という、ひとつの危機水準ですけれど、今、ほぼ20%まで来ているのがイタリア国債です。どう見てもヨーロッパの連鎖崩壊が起きそうな気配があるといいますか、どうやって処理するのか、多分当事者たちも困っているんでしょうけども、外から見ていてもよく分かりません。

一方において、内容は違うけど似たような性格の問題を抱えているのがアメリカです。アメリカとEUの両方ガタガタになってしまうという可能性がかなりあります。こういうのは予測ができない部分があるので、「絶対こうなります」とは放射能と一緒ではっきり言えないところがあるわけですが、まじめに研究している大方の人たちの予想としては、まず少なくとも50%ぐらいはアメリカとヨーロッパ両方が当たっていくだろうと思っています。相当予断を許さないという感じになってきています。

そうなると、いわゆる新興国も無傷ではなくなってしまうわけです。例えば中国という国は、アメリカとEUへの輸出で持っているような国ですので、この2つがガタッとくると、当然ながらガタッと来ます。しかも、中国自体もバブル経済で支えてきたようなところがあるために、何かガタッときたときには、国内体制がきちっとできていないだけに、治安の悪化と内乱的な状況とか、そのバブル経済的な問題も一気に噴き出してくる。それから、当然ながらそうなってきますと、チベット自治区やウイグル自治区など、かねてから中国であることに不満を持っている地域というのもまた動きを見せるということになってきますので、中国はどうなるんでしょうという、そういう可能性も出てきてしまいます。

また、そういう中で日本だけが無傷などということはあり得ないわけで、当然ながら、世界中大混乱という事態になりかねない確率がますます高まってきてしまっているということがあることも確かです。

これは、一つの経済危機という問題だけではなくて、17世紀以降の近代的な仕組みというもの自体が、もうガタがきているというふうに思わなければいけません。17世紀以降、17世紀というと1600年ですから、近代社会ができているわけではないんですけれども、歴史から言うと大体そのころに、近代社会の基になっていくようないろいろなものができ始めるわけです。例えば、私がやっている哲学でいくと、デカルトなどという人が登

場してきて、いわゆる近代哲学の基盤をつくっていくといったことが起こったり、あるいは科学というものが発達してきたり。そういうことをいろいろ経ながら、本当に近代社会ができていくのは 18 世紀や 19 世紀なのですが、徐々にその芽ができてくるのです。

そうやって生まれた、およそ 400 年と言ってもいいし、250 年ぐらいに取ってもいいし、そういう一つの歴史の結果として、19 世紀ぐらいになってみると、経済的には資本主義という形ができていきますし、国家の形態としては国民国家という形になりますし、社会形態としては市民社会という形になります。また、そういうのと結びながら近代技術というものが出来上がっていくわけですけれど、そのすべてがもうガタガタになってきてしまったというのが現実だろうという気がします。

今回の震災などに絡めながら考えてみますと、1700 年代の終りごろ、イギリスに経済学者でマルサスという人がいました。有名なマルクスではなく、マルサスという方です。マルサスの本としては「人口論」というのが大変有名で、今でもロングセラーで読まれている本です。ただ、マルサスが書いたのは 1798 年ですが、イギリスの場合には、その前にもう産業革命に入っていますので、特殊に近代的な世界に移りつつあったというふうに言ってもいいのですけれども。

この本は、マルサスが 28 歳ぐらいのころに、若さと勢いで書いた、内容的には結構雑な本なのです。何が書いてあるかというと、「文明の発展は人口の増加をもたらす。ところが、人口の増加をもたらされても、農業は生産力をあまり拡大しない。だから結局、最終的には食料問題が起きてくる」ということを書いただけの本なのです。内容的には大して深い研究をやったわけでもない。ただ、これは当時ベストセラーになりまして、それから 200 年たっても読み継がれています。それは確かに雑な本なんだけど、一面の真理がいまだにあるということが、一つは言えるということです。マルサス自身も、この本であまりにも有名になってしまったので、その後経済学者として活躍するのですが、あまりトップクラスの経済学者という感じはしないけれども、何を基準にいいと言うか知りませんけれども、そこそこにいい経済学者というか、いわばイギリスの古典経済学の中では、まずまずの名前を連ねていくような経済学者として活躍しました。何歳になっても「マルサスです」と言うと「ああ、人口論だ」と言われて、晩年はもうそれが嫌でたまらなかったという、そういうものでもあるのです。

その中で、ついでに紹介してしまいますと、彼は社会主義に反対したのです。当時まだ 1790 何年ですから、ロシア革命にはまだ 100 年以上早いです。当時、社会主義というのは、具体的な話ではなくて、ひとつの夢物語でした。つまり、人間が限りなく共同で、そしてみんなして働いて、みんなしていい社会をつくるんだという、そういう理想社会というイメージで「社会主義」という言葉があったというのです。だから、それを受けて言っているのですが、マルサスの反対論というのは、社会主義というのはそういう理想的な、人々を幸せにする社会であるとすると、何が起きるかと。人口が増える、そうすると、最終的には食糧難になる。だから、社会主義というのは一時の幸せのために将来の不幸を招く仕組みだと、こういう反対論をその人口論の中で書いていて、実に粗雑と言えば粗雑なのですが、まだ社会主義のイメージがはっきりしない時代ですから、面白い反対論だなということでもあると思います。

このマルサスの「人口論」自体は今言ったとおり、雑ではあるけど、いまだにやはり人口増と食糧問題というのは、ある面では世界の課題であるということですので、消えることのない本なのです。実は、この本が出たときに、いろんな所から反論が出るのです。それは、まだ潅漑（かんがい）などをやれば農地は増やせるとか、農業技術を改良すれば生産力を上げることができるとか、そういう式の反論は出るのですが、それにしても、この問題に関してはマルサスが言っている方がやはり正しいわけです。ある程度農地が増えたり、ある程度生産力が増えるとしても、そんなものは無限には増えていないわけで、いずれどこかで困難に直面するということは間違いない。

結局、このことが当時非常に大きな議論になった理由というのは、マルサスは食糧問題という形でしかそれを語っていないのです。実は、資本主義というのは、無限に発展し続けることによって正常であるという、そういう仕組みを持っているということです。資本主義というのが、エネルギーを持つためには絶えず技術革新があったり、いろんなイノベーションを展開しなければいけない。そうすると、生産性は上がっていってしまうわけですから、その生産性が少しずつでも上がる以上は、全体のパイが拡大していかないと、必ず失業問題などが起きてくるわけです。だから、生産力が上がらない状態で、技術革新だけが進むとかいうことが起きてしまえば、当然ながら労働力はそれだけ要らなくなってしまいますから、その分、必ず失業問題が起きてくる。そうなってくると、そのことが今度は市場を冷やす。つまり、失業者が増えてくれば、失業した人たちが買えないではなくて、まだ失業してない人たちも、予防的に節約するとか、ちょっと行動を止めるということになってきますから、それはたちまち市場を縮小させる。そうすると、これは悪循環になっていって、大混乱を招く。資本主義は、一面でこういう仕組みを持っているわけです。

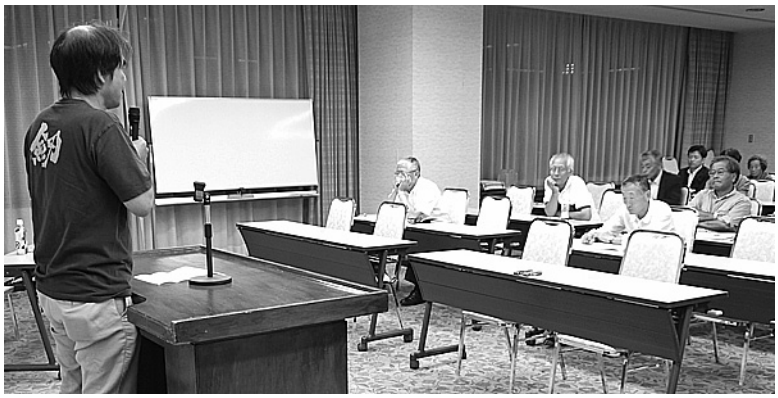
だから、そうである以上は、絶えず生産力が拡大し続ける。今どきで言えば、GDP が拡大し続ける、それからその中で絶えず起きているイノベーションみたいなものがうまくマッチする、その状態が正常であるというのです。そういう宿命を持っている経済構造なわけです。そうなってしまうと、もし永遠に資本主義が発展し続けるとするならば、それは無限に経済力を拡大し続けるということが必要になってくるわけです。

ところが、無限に経済力を拡大し続けなければいけないということになると、自然が無限に存在しないとつじつまが合わなくなるという問題があります。例えば、それは資源の問題でもそうなのですが、生産力を無限に拡大する以上、資源の方も無限にどこかから見つからないとうまくいかないということが、当然ながら起きます。ところが、資源が無限に存在するなどというのは誰も信用できないわけで、地球の体積が決まっている以上は、いずれどこかで頭打ちになるだろうということは誰が考えても分かることです。そうすると、資本主義の原理そのものに根本的な無理があるということになってしまうわけで、この問題をどう解決するかというのは、当時の経済学者たちもちょっと困っていた問題なのです。当時の経済学者というのは、資本主義の発展を目指した経済学者ですけども、その人たちからすると、自然が無限になければいけないという問題があって、そういうことが頭にあるものだから、マルサスがそれを人口問題という形で食糧問題と絡めて語ったときに、ある意味では時代の議論になったというふう

に言ってもよかった。

この問題を、実はどうやって解決したのか。それは簡単な方法だったわけで、「自然は無限に存在するものと仮定する」という、極めて暴力的な結論を出しました。そんなもの仮定されても、あるわけがないわけですけども、その仮定をいわば日本的に言うと、あうんの呼吸でみんなが同意した。つまり、そうなっていないと困るからです。それは、その資本主義の発展を目指した経済学者たちだけではなくて、実は経営者たちも皆、それにあうんの呼吸で合意したわけで、そうでないと困ったと。ところが労働者も、あうんの呼吸で黙認した。つまり、当時の社会ですからいろんな問題もあるんだけど、いわば産業の発展とともにいくらかは資本主義によって経済が発展していくことをてこにして、労働者が豊かになろうとしたことは、労働者側も変わらなかったわけです。ただそのときに不平等な分配が行われているから、労働者はもっともらえていいのに不当に搾取されているとか、そういう批判であって、経済の発展自体がおかしいのじゃないか、などという議論は当時は全くないわけです。それは後に出てくるマルクスでもそうで、社会主義になればもっと経済は発展するんだ。つまり、変な、無駄なことを行わずに、もっとうまく発展するんだ。そのことによって、皆がもっと豊かになっていく。しかも、そこに平等社会というのがあれば、非常に幸せな社会ができるんだと、マルクス自身もそう言ったわけです。

ですから結局、この「自然は無限に存在するものと仮定する」という仮定を、経済学者や経営者、さらには労働者まで、すべてが暗黙のうちに合意するという、不思議な現象をつくってしまいました。



ところがこれは、暗黙の合意をいくらつくっても、「そんなわけでないでしょう」と、これは子どもでも分かるわけで。そうすると、やっぱりこの問題はどこかで解決をつけないといけませんでした。結局それはどういう解決だったかというと、将来の科学に丸投げするということだったのです。つまり、将来の科学は解決してくれるだろう。これは原発問題と全く同じなわけで、原発を造れば放射性廃棄物が出る。今度のような事故がなくても、それは当然ながら放射性廃棄物が出るというのはよく分かっている。

近ごろ少し有名になった「100,000 年後の安全」というフィンランド映画が日本でも上映されています。これは一種のドキュメンタリー映画で、フィンランドが本当に今やっていることで、放射性廃棄物を最終的にどこに捨てるかということです。フィンランドには非常に硬い岩盤があるので、そこにトンネルを掘って、地下深くまで持っていって、そこに放射性廃棄物を金属容器に入れて埋めるのです。ところが、金属容器は、今考えられ得る限り安全な金属を使っても、1,000 年は持たないといいます。だから、いずれぼろぼろになって、放射性廃棄物がそこにばらばらに出てきてしま

う。ただ、その岩盤の中に閉じ込めることによって、何とかなるだろうという形で今、フィンランド政府がやっているドキュメンタリー映画です。

それで、フィンランド政府が考えている、その中に埋めておく時間が10万年というのです。そこの岩盤は10万年ぐらいは大丈夫だろうという読みになっているわけですが、幸いにしてというのか地震がない所です。それから、100万年ぐらい前にできた岩盤であるとか、いろいろあります。結局、それしか方法がないので、今そういう場所をフィンランドは5カ所か6カ所造っているわけです。

ところが、その映画というのはやっている人たちがまじめに議論しているわけですけれども、困ってしまっているのは、「ここに放射性物質が埋まっているよ」ということを10万年間伝えなければいけない。そうしないと逆に危なくなってしまう。それは地下深くて岩盤がしっかりしているから、多分そこから漏れ出してきて、地表にあふれ出てくるようなことは多分ない。だから、そこの真上には人は住まないけれども、少し離れた所に人がちゃんと住んでいて、「あそこは危険個所である」ということを代々伝えていくことをしていかないと大変なことになってしまう。知らなくなってしまうと、例えば開発しようとして穴を掘ってしまうとか、そういうことは起き得るわけです。ですから人間がちゃんと住んでいれば、まだ何とかなるかもしれないということです。8,000年後だか何かにもう一遍氷河期が来るらしくて、氷河期が来ると、みんな南へ南へと逃げてフィンランドは人がいなくなるということが分かっています。それで、また暖かくなってくると戻ってくるという、どうも、過去もそういうことだったらしいです。

そうすると、氷河期を越えるだけ伝達する方法はどこにあるのかというので、これはとても看板を立てたぐらいでは10万年持ちません。そうすると、何かどこかでいい石はないかとか、石組みでやっておけば何とかならないかとか。しかし、石に彫り込んでおいても10万年、そんなものが風化せずに残るということがないわけで。結局、10万年間の安全を確保するというのは人間にできるのかという。それを非常にまじめに推進しながら議論しているという、一面ではばかばかしいと言えば、ばかばかしい映画ですけども、放射性廃棄物の現実とはそういうことなわけです。

だから、日本でも今、どこかに埋めなければいけないのですけど、日本の場合には地震があったりするので、そんな10万年間安全な地表などというのはちょっと想像がつかないということもあります。本当に、どうするのですかということなのですけども廃棄物は出るわけですから。そういう問題は分かっていたわけです。結局、どういう形で解決したかというと、将来の科学が何とかするという解決手段なわけです。ところが、将来の科学においても何ともならないということで、今、困ってきたということなわけです。

だから、フィンランドの場合には最も原始的な地下深くに埋めるということになってしまい、しかもこの地下に埋めたものは、一面では危険物なのですけど、一面では宝の山の可能性もあるわけです。つまり、それを掘り出して何かやろうとする人たちが現れたとき、その人たちにとってみると、廃棄物で濃度を多少下げてあったとしても、天然のウランと比べればはるかに濃縮が進んでいるものですから、これを掘り出して、例えば原爆を作るとかいうことになってきますと、非常に便利な原材料になります。もちろん、直ちにそれを原爆に転用できるわけではありませんが、もう一

遍再処理をうまくすればなるわけです。だからもしかすると、そういう意味で宝の山だと思う人たちが発生する可能性があるというのです。そういうものを阻止するということも、10 万年間継続するという、本当に「どうするんですか」としか言いようがない問題を発生させたのです。そこにあったのは、今言ったように、人間たちに不都合な問題はすべて将来の科学に丸投げするという発想なわけです。

それで振り返ってみると、私の子どものころもそうだったのですが、当時盛んに言われたのは、「がんはあと 3 年したら治る」と言われていました。それは新しい治療法が発見されて、もう怖がる必要のない病気になるというふうに、いつもなぜか「あと 3 年」だったのですが、いつまでたっても永遠の 3 年だなと思っているのです。

今でも、3 年とはさすがに言わなくなりましたけれども、何か画期的な薬ができつつあるとか、画期的な一種の放射線治療の応用ができつつあるとか、言われ続けています。しかし、最近分かってきたことというのは、がんというのは人間の生命現象と結んでいる一つの現象なので、むしろ上手に付き合うということの方がずっと重要で、たたき潰すという対象ではない。もちろん、それがどんどん大きくなってくれば生命そのものが持たなくなりますから、それなりの治療をするにしても、敵対物というとらえ方だけだと、生命が必然的に生み出すものである以上は逆に生命の方がまいってしまうという、そういうことも起きてしまうということがだんだん分かってはきたのです。そうなると、むしろ治せないということになってくるわけです。治せないものにどう付き合うかという。ただ、もう命が危ないようなことになってくるなら、ある程度手を打ちながらも共存させるという、そういうことしかないのではないかというのは出るのですが、結局こういうことも、例えばがんとか病気という人間にとって不都合なものになってくると、まさにこれも将来の科学への丸投げであって、「将来の科学が何とかしてくれる」という形で絶えず言ってきたわけです。

これはエネルギー問題でも、私の子どものころ言われていたことで言えば、もうとっくに解決が着いていたはずです。というのは、核分裂を使ってやるのではなくて、核融合炉ができているはずだったと。それで日本も多大な大金を使って、実験炉を造ったりしてきたわけです。今回、原発が駄目になっても、核融合炉があるではないかと誰も言わない。核融合というのは、二重水素とか三重水素、これは海水中に結構あるんですけども、もちろん濃度は低いです。だから海水中に、二重水素なら、2 つが結合している水素、三重水素になったら、3 つが結合していると言っていいわけです。その水素を原料にしてエネルギーを取り出していくというやり方で、これは太陽が光っている原理でもあるわけです。

ただ、核融合になったからといって放射性物質が出ないわけではなくて、放射性物質というのはなぜ、放射線などが出てくるのかというと、取りあえず元素レベルで見ていくと、非常に安定している物質というのがあるわけです。例えば、鉄というのは非常に安定しています。だから鉄というのも純金と同じで、純鉄というのが実験室的にはもうできているのですが、不純物がない鉄。実際には 99.99%ぐらい、純金もそうですが、不純物がないと。そういう鉄ができると、これは分子レベルで鉄同士がガチッと結合してしまうわけです。そうすると、全くすき間がない。すき間がなくなってしまうと、ほかのものが入っていく場所がないわけです。その結果ど

うなるかというと、錆びない鉄というのができてしまうわけです。これは一面では夢の鉄で、もし錆びない鉄ができたら、船などは塗装することなく走ることができるとか、いろんなことになってきますので、多分非常に便利なものができるんでしょう。今のところ、それを実用レベルでつくっていくとか、その方法がまだないということで、できないということなのです。

ただ、そういうふうに鉄というのは非常に安定していて、もしも純鉄ができるならば、錆びることさえないというぐらい安定しています。ただ、今の鉄はいろいろな不純物が入っているから、そこのすき間から酸素が入っていったりするのです。そうすると、錆びるという現象が起きるのですが、それにしても錆びる程度であって、非常に安定した物質であることには変わりません。

それに対して、放射性元素というのは、実際には 200 種類以上あるのですが、非常に不安定なものなわけです。安定しないから、絶えず何かに変わろうとするというふうに思えばいい。つまり、安定を求めて変わり続ける。そうすると、その安定を求めて変わり続けるときに放射線が出てくるわけで、そういう性質を持っているものを使っているわけですから、安定した放射性物質というのはないということなのです。だから、何らかの形で閉じ込め続けない限りは、非常に危険なものであるということです。

そうなると、放射性廃棄物だからいいというわけではなく、これもまたその中にはいろいろな放射性同位元素が含まれているわけで、それがまた安定を求めて、いわば変身をし続け、そのたびに放射線を出すということを繰り返していくわけです。

だから、そういうふうに言うと、先ほど言った二重水素とか三重水素というのも、海水中に、パーセンテージで言えば見えない程度にごくわずかですけれども、海水は多いですから、それをうまく取り出せば、結構あるという言い方はできるわけですが、これもまた不安定なものです。安定するためには、ただの水素にならなければいけないわけです。ただ、その海水の中でごくわずか、その状態が保てるということなのです。それを取り出してきて、ただの安定した水素に戻してあげる。そうすると、そのときに膨大なエネルギーが出てくるのですが、当然ながらそのときには、また放射性物質が出てくるということでもあるわけです。

少し話がおかしくなりましたけど、核融合などというのも「夢のエネルギー」とか言われて、やったのですが、今のところはっきり言うと、全くめどが立たないということになっています。結局、人間の方がもう制御できるレベルを超えてきているわけで、人間がつくった人工空間の中でそれを上手に取り出すなどということがもうできなくなってきている、そのレベルに挑戦し始めているから、どうやってもうまくできないということがだんだん分かってきて、最近では、核融合という話はあまり言われなくなってきてしまったという感じがします。

ただ、私が言いたかったことは、マルサスが「人口論」を出した時代、資本主義は無限の経済発展を遂げなければいけない。それが正常な姿だとすると、自然も無限になければいけない。しかしそこには、仮定はしたが、やはり無理がある。結局、それをすべて将来の科学が解決するだろうと丸投げをすることによって、いわば心の平穏を得たと言った方がいいわけです。そうやって出てきたのが資本主義です。だから、資本主義というのは

初めから大きな不正を持っているわけです。今まで言われてきた不正というのは労働者が搾取されているとか、植民地の問題とか、そういう形でいろいろな不正が言われてきて、それももちろん無視してはいけないのですが。その前からそういう、「自然が無限にある」とか、「将来の科学がすべて解決する」などということを前提にして成り立った仕組みであるという、すごい不正があるわけです。この不正の問題が、今、露見せざるを得なくなってきたというふうに思えるということなのです。

行き詰った資本主義の原理

実はこれ、いろいろな問題が露見せざるを得なくなっていて、自然が無限にあるという見解も、資源問題から言うと、思った以上に資源があったのです。つまり、例えば石油などでもそうですが、以前よりもかなり深い所までボーリングして取り出せるようになってきたとか、探索技術が進んできたとかいうことがあって、以前には石油がないと思われていた地域などにも、意外にあるということが発見されました。そういうことが繰り返されたときに、あたかも無限にあるかのごとく、何十年とか、今では 100 年以上も過ごすことができたのです。

ただ、最近になってきて、これがもう終わったなという感じになってきました。というのは、石油などもそうですが、例えばイギリスとノルウェーの間ぐらいですが北海油田が発見された。それ以外にも、インドネシアあたりに元から小さいものは見つかっていたわけですけれども、今までないと思われていた地域に大きいものが見つかるとか、あるいは、ベトナム沖にもそこそこありそうだとか、いろいろな新油田の発見というのが過去にあったわけです。けれども、最近はなくなってしまったのです。だから、今まで掘っている場所で、またもう１本パイプを入れたら出てきたとかいうことはあるのですけれども、昔のように北海油田発見といったような話がもうなくなってしまっています。そろそろ資源的な限界がはっきりしてきたのだろうと思われます。

そこに資源の限界があると認めてしまうと、これは資本主義の原理に反しますから、そうすると例えば「オイルサンドがあるじゃないか」とか、いろんなことを絶えず言うわけです。「どこかに何かあるよ」ということを言い続けていくというのが、本当に資本主義の原理の一面でもあります。

もう１つ、資本主義の問題を考えていくときに、かつての資本主義というのは先進国において富が独占されていたということです。だから、先進国がすべての富を集めて、いわば仲間うちで分け合っていた。結局、それができなくなった。それが中国の台頭だったり、インドの台頭だったりするわけです。例えば、タイやマレーシアでも、区分分けでは途上国に入っているけど、実は以前と比べたら、はるかにいろいろな生産力を持っているわけです。そうすると、先進国の独占ができなくなってきた。このあたりがいろいろな問題を起こすわけですが、先進国の独占が崩れていくというのは、大局的に見るといいことなのです。つまり、世界が平等になっていくということですから、いつまでも先進国が富を独占し続けるのは、いいはずはないのです。ところが、独占することを前提にして成り立っていたのが先進国ですから、その先進国に住んでいる人たちからすると、かなりのダメージを受けざるを得ないということです。

だから、中国が生産力をつけても一面ではいいわけで、何も、中国人はずっと自転車に乗り続けなければいけない決まりはないわけです。だけれども、中国が車や電気製品をつくったりしてくれば、先進国はそれだけ市場を奪われていくわけですから、かなりダメージを受けます。だから、絶えずそういうことが起きていることを覚悟せざるを得なくなってきました。しかもそこに、いわばグローバルな新種ということがかみ合っているわけですから、そうすると、どこかにガタが来ると全部いってしまう。最初に言ったとおり、アメリカ、ヨーロッパがおかしくなって、中国が無傷でいるわけはないのです。そうなって、日本が安全であるはずはないという、まさに世界連鎖を起こすのです。

だからそういう形で、いろんな意味で資本主義そのものが持たなくなってきました。にもかかわらず、それに代わるうまい提案はないという、そこにこそ、今の問題点があるというふうに言ってもいい。

国民国家もそうで、国民国家というのは別に国民のための国家を言うわけではなくて、日本だったら、それまでは人間たちは自分の所属する、例えば地域に属していた。例えば、何とか村の太郎べえなわけです。その次には、土佐藩の。だけど土佐藩までいってしまうと、何とか村の太郎べえさんからすれば、年貢の問題が絡んでくるだけで、日常の生活の世界としては何とか村の太郎べえさんでいいわけです。ましてや日本国になると、これはどうでもいいわけです。そうやって、つまり人々がそれぞれいろいろな所属を持ちながら生きてきて、そういう体制をつぶして、人間をすべて国民という形で、その点では平等にする。それを別の言い方をすると、国民としてばらばらな個人に変えてしまう。つながりのない個人にしておいて、それを国家が一元管理をするという、それが国民国家という形なので、別に国民のためにつくってくれたわけでは全くないわけです。だから今、日本もそうですけども、我々は国民として国家に一元管理される。そういうのが一番分かりやすいのは、例えば年金制度とかなわけです。

私は喫煙者ですけれども、何で国家にたばこまで管理されなければいけないのか、さっぱり分からないという気がしています。「人に迷惑を掛けることはやめましょう」という話ならいいですけれども、「国民健康増進法」などという法律を国家がつくる権利があるのかという気がしてくるわけです。それをつくるぐらいなら、人間の健康に一番悪いのはストレスなので、ストレスを一番与えているのは国家なので、国家の方が自ら監獄に行くというようなことを考えてもらいたいと思っているぐらいなんです。ただ、それも本当に国民をばらばらにして、健康増進法で管理するという、誠に不思議な仕組みになっているわけです。だから、それが人間同士のやりとりで、「こういう会場で吸うのはやめようね」とか、

それはいいわけですが、そういう形でできてきた国民国家というのが、実はもう持たなくなってきました。

これはもうご承知のとおり、日本の国債が持つのですかということですし、はっきり言えば今の国債レベルだってどうにもならないのに、これ以上、1 円でも増やすことはまかりならんとしか言いようがないわけです。しかし、そういうことになれば、恐らく今年の税収は 40 兆円とか、せいぜい多くて 40 兆円台ということになっていくでしょうから、復興財源は仮に臨時増税あるいは資産売却などで賄ったとしても、来年度の概算要求は 90 兆円なわけです。だから、概算要求を半分にしなければいけないということになるわけです。仮に概算要求を半分にするということになると、本当に何もできない。それは社会保障制度まで含めて、良い言い方をすれば抜本的改革ですけれども、悪い言い方をすればすべて破壊するというぐらいのことになりかねないわけです。しかし、じゃあ国債をまた 50 兆円発行していいのか。そろそろ、もう完璧に限界に来たという感じです。つまり、もう手の打ちようがないという感じなわけです。だから、収入に見合った支出だけにすれば、社会が持たないという現実があるし、だからそこを国債に頼れば、また持たない。それで今度は、じゃあ増税でそれを全部賄うなどということになれば、今の税制・税金をすべて倍にしなければいけないわけで、そんなこと持つわけがありません。つまり、どのルートをたどっても持たないという結論しか出てこないというような、それぐらいひどい状況に来てしまったと言えます。

ですから、本当にこれはただ日本だけの現状ではなくて、もう先進国はどこも似たり寄ったりです。国債の発行量で言うと、日本が飛び抜けてすごいというのです。ただよく言われたとおり、日本の貯金が国債に回っているものだから、海外から売り浴びせられるということがないというだけで何とか来たわけですけれども、もうそれができなくなりつつあるのです。最近、中国が随分日本の国債を買っていますけど、そうすると「大丈夫ですか？」「何かあったときには知りませんよ」という話にもなりかねないわけで、既にもう安全圏は越えたという感がしています。

それで、また近代がつくった市民社会の仕組みも、人間がばらばらになって孤立していくだけだというのが分かってきて、結局ここでも、一昨年あたりから絆の回復とか、結びつきの回復とか、逆に国を挙げてキャンペーンをするという時代に入ってきてしまいました。

だから今でも、防災という考え方でも、昔の防災というのは、いかにコンクリートで固めて、被害のない仕組みをつくるかという、それが防災でした。私もこの災害の後、結構これまで何遍も付き合ってきた日本建築学会という団体があって、日本建築学会は、私たちからすると、1968 年に悪名高い学会決議をしていて、「日本の社会から木造建築を一掃する」という決議をやっているのです。「すべて、鉄とコンクリートに変える」と。それを受けて、当時の建設省が建築基準法の抜本的改革というのをやりまして、木造建築の一掃まではすぐいかなかったけれども、非常に木造建築を造りにくくさせました。というのも、出発点をつくったのが 68 年の、しかも個人の見解ではなく、学会決議ということをやったということです。今も、そのことを知っている人たちからは「早く自己批判して撤回しろ」「正式に学会を開いて、大会で謝罪しろ」と言われているのですが、いまだに撤回はしていません。ただ、それに対して批判的だった人たちが今の主流派な

ので、今の建築学会の中軸は、もうそういう人たちではありません。ただ、その人たちが本当に困ってきたのは、建築とは何かという問題です。つまり、それまでは、「こんなものを造ってほしい」と必ず注文主がいるわけです。そうすると設計をするわけですけれども、多分に、有名な建築家であればあるほど、建築家の作品にしてしまおうという傾向があったわけです。だから、使ったら意外と使いにくかったり、エネルギーをものすごく使ったりとかがあった。特に、鉄とコンクリートとガラスが使えるようになったものだから、ガラスを多用するようになって、それが夏などのかんかん照りの所でガラスの温室を造ってしまって、そのためにクーラー代がすごいとか、いろんな問題も起きて、結構使いにくいというようなこともあります。

そういう時代があって、それへの反省が始まって、建築とは何だったのだろうかいうことで、今、中軸にいる人たちは、建築にはむしろ完成系はないんだというふうに考えている人が多いです。つまり建築というのは、やはりそこに人が集まってきて、完成させていくんだ。だから、変わっていける建物でなければいけないんだと。コミュニティと建築は一体でなければいけないと。だから、家の場合だったら家族という小さいコミュニティで、家を完成させていく。そうすると、家族構成も変わっていきますから、そういう中で家自体も変更できる家といいますか、建て直さなくても、場合によったら間仕切りが変えられるとか、そうやって絶えずコミュニティにとっていい家というふうに変身を遂げていくという。

だから、公共の建物などでも一遍に完成させない。空き地なども残しておいて、そこに集まってきた人たちが、次には、場合によったら図書館が欲しい。そしたら、それを横に増設したりするような形で、本当にコミュニティの建物にしていくというようなやり方。建築家が出来上がりを提示するのではないという方向に、今のトップ建築家の人たちはきています。もちろん、全員がそうではありません。だから、その点では安藤忠雄などはもう古いと言われている時代でもあるわけで、作品性は高いかもしれないけど、あまり使いやすくもありません。彼などは作品にしてしまいますから。その前の丹下健三よりはましかという感じですが。

その建築家の人たちは今、三陸などに入っているのです。それで、例えば仮設住宅があると、国の予算が下りてこなくても自分たちの資金を使って、その横にコミュニティセンターを造るとか。そうでないと孤独死が起きてしまうし、そうやって人が集う場所をつくっていくと。この間もその写真を見せてもらいましたが、今までガラスと鉄を使って、すごくきれいな建物を造ってきたおじさんが何と、長屋のようなものを造っていました。それは、そこに被災してきた人たちに、人が集まれるには、どういうものなら集まりたいかというのを聞いて歩くわけです。そして、当然ながら、ある程度ローコストでやっていることもありますが、その人たちの意見に基づいて造りました。そしたら、縁側のたくさんある長屋みたいな感じになってしまっていて、これが今の先端建築かということになったんですけれども、実は、ここにこそ今の先端建築がある。三陸の被災した人たちが、そこで孤独にならずに集まってこられる場所。しかも、そこにボランティアの人たちが行って、支援のできる場所。そういうものを造っていくと、それは決して、素晴らしい、見た目のいい建物ではなくて、むしろ昔の長屋が開放的になっているようなものの方がはるかに人間的なものだという、

そんなものを造ったり、今はそういう時代に来ています。
だから、当然ながら今後は地域の復興ということで建築家たちに多少の依頼は始まってはいるのですが、人によっては国の委員会に入っていたりもしているのです。そういう方法ではなく、コミュニティの中で建物が復興していくことをどうやるのかということで、いろいろなことを考えなければいけなくなってきて、それで最近、建築学会に何遍も付き合わされています。大会にも参加させられてしまったし、この間は、国際シンポジウムにも参加させられてしまいました。しょうがないから行ったら、同時通訳が付いていましたけども、私以外は全員が英語の発表でした。だから逆に、日本人まで英語の発表をして、英語の分からない人は同時通訳を通して日本語を聞く。世界中から50カ国ぐらい集まっていました。そこでも、「復興と建物」という問題で行われていました。そういう時代になってきたということです。
先ほど言ったとおり、そういう所でも近代の技術というのは見直されているわけですけど、個々の技術に問題があるということよりも、私たちは技術に丸投げしながら、矛盾に目をつむっていくという、この在り方そのものをもう見直さなければいけないということでもあるわけです。だから、将来の科学が何とか解決するということで、そのことを担保に置いて、やりたい放題やってきた。だけど、そうではなかっただろうということです。

巨大な社会システムが連鎖し合う現実

それが技術の問題だけではなくて、こんにちの問題をつくってきた巨大システムの問題の方にも言えるわけです。私自身は3月11日に、東京の比較的都心部に近いマンションにいたのです。翌日、私はフランスに行く予定だったのです。行くにもそれまでに片付けなければいけない仕事がなかなか終わりませんで、必死になってその1週間ほど仕事をしていて、ようやく仕事が片付いたので、ちょっと準備をしようということになりました。私の準備は大したことないのですが、朝から何も食べずに仕事をやっていたので、外に行って菓子パンを買ってきて、菓子パンをかじりながらトランクを出して荷物を入れるという作業を始めましたら、グラッと来たという感じでした。
幸いにして私の所は全く被害がなかったのですが、エレベーターは止まりました。私の家は4階なので、まだトランクを持って1階に降りるぐらいの体力は持っているので何とかなるのですが、もっと上層階にいる方、一番高いマンションだと、40何階というのがあります。すると、やはりエレベーターは被害がなくても安全上、自動的に止まってしまいます。そして、あれは点検が来るまで動きませんので、1日か2日は駄目となるわけです。そうすると、40階に住んでいる高齢者などは大変なことになってしまうわけです。
今回、東京の浦安地区あたりが液状化現象を起こして、結局、水道管が破裂したこともあり、エレベーターは動かない、水道管は破裂、さらには停電と、そんなことが起きてしまった。特に、お手洗いの問題が一番困りました。そうすると市の方は、しょうがないので近くの公園に仮設トイレを造りました。ところが、40階の方が階段を降りて仮設トイレに行って、また戻ってくるというのは、想像するのも嫌だという感じでして、これは

冗談話ですが、お手洗から帰ってきたら直ちに歩き出さないと、次のお手洗に間に合わない。だけど、本当にそれを現実にしてしまった人たちが結構出てきて、こういうところが災害の弱さなのでしょう。

私の所は先ほど言ったとおり、コンクリート、アスファルトしかないような地域なので、確かに放射線の濃度自体はどんどん減ったんです。ところが、私の所は電気も水道もついていたので、お手洗問題はなかったのですが、お手洗が止まった場合に、こういう場所は穴を掘る場所もないのです。だから、私のもう1つの上野村だったら、「そんなもの、庭に穴でも堀っておけ」という話で済んでしまうわけですけれども、この穴もない所に何百万人が密集しているような状況で、どうするのかということは当然起きてくると思います。だからそういう意味でも、これはもう東京は持たないなという感情を、かなり多くの人たちに与えた出来事でもあったのです。

その日の6時か7時ごろ、電車が止まったりして翌日の飛行機に間に合わない可能性があるので、今のうちに成田に行って、成田のホテルに泊まっておかないと危ないなという感じになってきたので、それをやろうとしたんですけど、成田に行きようがないというのです。電車はすべて止まっているし、家から成田までタクシーで行くと3万円近く掛かるので絶対に乗りたくないのですが、背に腹は代えられないというのでタクシー会社に片っ端から電話をしたのですが、全部駄目でした。ですから、もう交通手段がありませんでした。

そんなことで、夕方、下を見ると道は完全に渋滞していて、大体1メートル車が動くのに1分かかるという感じでした。全部止まってしまったから、車が確保できる人は、会社の車であれ何であれ、車で帰ろうとしました。結局、それで大渋滞をきたしてしまって動かないし、歩道は歩く人であふれかえっていました。上から見ていると、本当にすごい人の数だなといった状況になってきました。どうしてみんな、あれだけ家に帰ろうとしたのか。後で帰ったという人たちに会うたびにどうして帰ったかを聞くと、やはりみんな理由があって、例えば、小さい子どもを保育園や託児所に預けているなどです。こういう事態だから、夕方6時になったら子どもを外に放り出すということはないということは分かっているけれども、やっぱり子どもも当然不安になっているし、一刻も早く顔を見に行ってあげたいということで、夫婦のうちのどちらかが必死に帰る。大体男の人が一生懸命帰ったという感じになりました。それから、家に介護をしなければいけない人がいて、それも重度の介護ではなくて、ちょっと昼間、一人で置いておくぐらいのことはできるけど、夕方になって誰も帰ってこないと不安になってきて、自分でいろいろなことをしようとし始めて、それが逆に危なくなってくるという人たちを家族に抱えているケースがかなりあります。何としても早く帰らないと、どうなってしまうか分からないという、そういう人もいました。だから、実は帰らなければいけない理由を持っている人はほとんどの人が帰っているのです。その人たちで道があふれ返る。ですから、もうこの社会は持つのかなという感じになったわけです。

結局、そこで分かってきたことというのは、原発という仕組みも、それから私の所で言えば東京電力ですが、そこの仕組みも、非常に巨大なシステムになっていて、それから交通も一つの巨大システムだし、情報通信もそうです。今回も、携帯電話がかからなかったわけです。メールだけは使えたのですが、携帯がもう音声不能になってしまったので、電話連絡も実

はうまくいかなくなってしまった。それでも、あのときはメールだけは何とかなったのですが、例えば、もしこの停電の状態が 3 日、4 日と伸びた場合にどうなるかというと、中継器のアンテナが機能しなくなって、仮に携帯に電気がいっぱい入っていても、当然使えなくなります。噂によれば、ソフトバンクのアンテナは、大体 3 日ぐらいでダウンする。NTT は 1 週間持つのではないかという、それぐらいのバッテリーを入れていると言われています。それも本当かどうか分かりませんが、ともかく、最大で 1 週間だろうということは確かです。そうなると完全にすべての情報は止まると言ってもよく、つまり電気が長期にわたり止まります。

そういうふうに、今の社会というのは巨大システムが相互依存関係をつくりながら展開をしています。だから、1 つの巨大システムが崩壊をすると、崩壊の連鎖が起きるのです。それが今回で非常によく分かりました。しかも、それが国家という巨大システムまで崩壊するということが分かりました。

今のままの仕組みでは真の地方分権は不可能

私は震災の次の日にフランスに行ってしまったから、何か逃亡したような感じになってしまったのですが。私もいろいろな人といろいろなグループをつくったりもしています。その人たちは実に早くから、いろんな支援活動に入ったといいます。みんなで情報を交換しながら、どうやったら一番有効な支援ができるかということをやってきました。そういうことをやりながら分かったことは何か。はっきり言うと国も駄目だったのですが、県の駄目さはそれを上回るというぐらい駄目だったと。さらに言うと、市町村も駄目だったと。ごく一部の市町村、平成の大合併を拒否してきたような市町村の中には非常に頑張った市町村もあるのですが、ほとんどの市町村というのが全く駄目だったというのです。つまり、国も駄目だし、県も駄目だし、市町村も駄目だということがよく分かったというのが現実だったのです。

つまり、これは地方分権ならいいとかいう問題ではなく、逆に言うとその地方もつくり直さないと、分権してもまともにならないということが、分かった。その三段階の行政すべてつくり直しをやらないと、この社会は持たないという感じになってきたのです。

実際には本当にひどいもので、支援する人たちが、取りあえずお金と物資を送ったわけです。東京あたりでは、ともかく市町村に送ったら駄目だということがありました。なぜかというと、市町村から被災者に配られないというのです。なぜ配られないか。「市町村の人手が足りないのならば、我々がボランティアで行って配るから」という人たちがそこにはいる

わけです。ところが、「これは市の権限で、ボランティアに触らせない」というのです。ずっとその状態なわけです。それで今度は、「じゃあ、集まってきたものを早く配れ」と言うと、「数を確認しない限り、不平等が起きる」というのが市の対応だったのです。そのうちにしばらくして避難所にいる人たちが、毎日冷たいものばかり食べている。初めはおにぎりと水が配られてきただけでうれしいけど、それが1週間も続くと、さすがに苦しいわけです。そのことに気付いて、私のグループにも結構料理人で加わっている人たちがいるので、避難所に調理できる状態でトラックに積んで行って、その人たちに料理してもらうということを我々の団体も随分やりました。大したものじゃなくてもいいから、とにかく温かいものを食べてもらうという。これは、私たちだけではなくて周辺の、東北地域の、例えばそば屋の組合の人が、とにかくそばを持っていって、そこで温かいそばを作って食べてもらうというようなことは随分やりました。ところが、例えば盛岡のそば屋組合が避難所に行くと、そこに来た役場の職員さんが「何食分持っていますか」と聞くので、「取りあえず100食分持ってきました」と言うと「お断りします。帰ってください」「この避難所には120人いますから、不平等が発生します」と言うのです。そんなもの、みんなに「20食事足りません」と言って、それで、「取りあえず高齢者とお子さんから食べてください。あとは分け合ってください」と言えばそれで済むことなのですが、役場の対応はすべてそうだったのです。あらゆるものに対して不平等が発生するというのです。

だから、毛布が来ても同じことが起きてしまって、「全員に配ることができなければ配らない」というのです。ところが、たくさん物が届いていて、その仕分けができてないから、全員分あるかどうか分からない。「だから、それが分かったので、ボランティアを出すから、それでどうかやって」と言うと、「市に対して来たものを、分からない民間にやらせた場合、後で責任問題が起きたら困る」ということなのです。すべてがそのような対応なわけです。それで、もう全然駄目だなと。

それから市の方は、依然として方針が立たない。ある原発に関連した市ですが、人口7万2,000人いた所の一部だけが、いわば緊急避難の準備地域のような感じで指定され、大半は指定されてないということなのです。当然ながら住民としては、指定されなければ安全なのかというのがあるわけですから、不安はあります。それに対して、市が全く方針を出せないできたわけです。そして、市は絶えず国に対して、「国がもっとしっかりしろ」しか言わないわけです。それで、自分の所では何もやらない。その結果、そこの市は6万人が逃げてしまった。今、1万2,000人しかいないというのです。ところが、そういう状況になってしまって、全員が消えた。6万人がどこに行ったのか分からないというのです。

そこの市長さんは、この間も少し会ったのですが、依然として非常に歯切れよく、「国が駄目だ。ともかく、国は権限を市にくれなければ駄目だ」などと言い続けるわけです。人気があって、マスコミでは受けているのですが、市長さんは「国が駄目だ」と言っているだけで、何も方針を出してないのです。それで、国が駄目だから市に権限をくれと言っているだけで、権限をくれたら何をするのか、何も言わないわけです。依然として無方針といいますか、結局、さっき言った物資までそんな状況ですから、もう全く駄目だということが分かりました。

その中で何人か、これでは駄目だというので、市の方針を無視して頑張る市役所の職員さんなどが出てくるのですが、その人たちも1週間後ぐらいにはもう疲れ果てて倒れてしまって、もうどうにもならないような感じでした。

本当に今回は、今の仕組みのままで地方分権をやっても全然駄目だということだけは分かった。だから、すべてを改革しながら地方分権をやらないといけないというのです。

それで、松本某とかという大臣が宮城県に行って、非常に不遜な態度を取って、みんなのひんしゅくを買って辞めました。確かに、あの発言はないわけで、あれでは辞めざるを得ないと私も思います。だけど、はっきり言って宮城県知事などは全くその最たるもので、何の方針も出せない。出した方針は、漁業権を株式会社に開放するという、誰かの入れ知恵をそのまま言っただけの話でした。しかも、それを本気でやりたくて、漁協などとも話し合いをやりながらやっているのだったらまだしもですが、何もやってないというのです。特に宮城県知事は本当に裏ではひどかったです。あの人は自衛官上がりなので、やっぱり自衛官上がりは駄目だと。上の方針を「イエス、サー！」と言っているだけだから、上の方針が来ないと何もできないのです。そういうふうに、裏では言われていたのです。だから、あの松本某という人がもう少しちゃんとした口調で言えば、あそこで言った言葉が実に妥当なことだったと裏では言われているという、そんな状況です。ですから、本当にもうすべて駄目になった。

実は国の方も駄目に決まっているわけです。なぜかというと、国も巨大システムですから、国のシステムがちゃんと動いてなければいけないわけです。ところが、東京電力はまともに情報を上げてこないという形で、システムがちゃんと動かない。また、その非常時に対応するシステムがちゃんとできていたわけでもない。だからドタバタでやれば、ちゃんとした機能などするわけがないのです。

私自身は別に民主党支持者でも菅さんの支持者でもないのですが、ちょっとあの人は対応がまずいなとは思っていましたが、今、国ができるのはあんなもんだな、という感じはしました。それは擁護している意味ではなくて、国という巨大システムも、また機能しなくなっていたと操作しておかないとまずいのでは、ということです。「もう少し人間的対応ができたのではないか」などということは若干は言えるかもしれないけれど、おおよそとしては、多分あんなものしかできない。つまり、そういう形の社会が出来上がっていて、むしろ、これでいいのでしょうかということを問題にしないといけないということなのです。

結局それは、巨大システムの問題でもあるのですが、同時に、素人の介入を許さない仕組みになっているということがまた問題なわけです。その点では、民主党も政権を取っていくまでは、もっとNPOやNGOなども含めて、いろいろな形で住民や市民が参加していくような形で、「日本の政治を変えていくんだ」ということを言ったような気がするのですが、政権について以降、そっちの方は何もしていないという感じです。むしろ、重要なのはそっちをやってほしいわけです。だから、それは市町村から県から国まで、どういう形で人々が参加できる仕組みをつくるかということをやっていかないと、危機になればなるほど機能しない仕組みになってしまいます。それだけではなくて、経済、あるいは電力なども含めてあらゆる領域

に、どういう方法を使ったら市民が参加できるかという仕組みを考えていかないといけないわけです。そうでないと結局、あの原子力村の暴走みたいな話になっていってしまうわけです。

先ほど言ったとおり、そもそも資本主義の形成期から、「自然が無限である」という理屈には無理があることは分かっていた。しかし、それを将来の科学に丸投げした。それが何を生んだかというと、将来の科学を担う科学者たちに全権を委ねてしまったわけです。だから、そもそもそこに村の暴走というのは始まっているわけで、つまりそこに権力を与えてしまったということなのです。それは、初期のころにはシステムがまだ巨大ではないから、原発事故のようなものは起きなかったのですが、しかし、だんだんシステムが巨大化していくと、まさに村の暴走になっていく。素人が全く対応できない仕組みをつくってしまった。しかも、そのときに非常にまずいのは、素人は受益者になるか被害者になるかしかないということなのです。事故が起きれば、確かに被害者です。だから、被害者として発言せざるを得ないのですが、ではその前はというと、実は原子力の安全神話があったからというのは、私は半分以上うそだと思っていて、原子力というのはかなり危ない面を持っていることぐらいは、よほど平和ボケしている人でなければ多少は知っていたでしょう。にもかかわらず、あえてそのことを問題にしなかったと言った方がいいわけです。それはなぜかというと、受益者だったからです。別に、原子力がなければ困ったかどうか分からないというのです。例えば、今年の東京の夏は、みんながそれなりに節電してみたら、別に簡単なことだったねというのが、みんなの気持ちとしては総括なのです。ですから、原子力がなかったら社会が回らないなどというのは本当なんですかというのです。実際には数字から言うと、ちょっと関西電力はどうかなという感じがあるのですが、それ以外はもう全部大丈夫だという感じなのです。

そういうことですけれども、無言の受益者集団の中に組み込まれていたということです。そうすると何となく、受益者で騒がない安定性みたいなものに身を置いていく。だから、誰かに丸投げしてしまう仕組みというのは、そういう形の、本当に受益者なのかどうか分からないけど、何となくある受益者集団に一任化していくということの問題点をつくってしまう。そうである間は、何となくおとなしくしているわけですが、ところが、それが一転して壊れたときには、全く被害者になるしかないというのです。だから、そこに加わったり、発言したり、あるいは何かを提案したり、そういうことが全くできない仕組みが出来上がっていくわけです。

例えば、四国で吉野川の河口堰が問題になって、あそこには第十堰という、昔からの堰があります。あれは、素人が参画できる堰なわけです。つまり、昔からちゃんと河川技術については、プロ集団というのはいるわけです。江戸期などでも河川技術者的な人たちがいたりして、その人たちがやっていくのですが、素人が一緒に加わっていくやり方といいますか、非常にうまいやり方が通っているのです。その代わり、時々少し直さなければいけないという、メンテナンスもあるのですが。

それに対して、今度の新河口堰の予定だったものは、これはもう完全に素人をシャットアウトした河口堰です。そうすると、仮に洪水が起きにくいとか、何かあったときには、無言の受益者みたいな感じになってしまうわけです。本当の受益者かどうか分からないのに、無言の受益者集団の一

員にされてしまう。ところが、その新しい堰が裏目に出て、被害が出てしまったということが起きると、ただただ被害者として発言するしかないわけです。その上に今度は、被害者としてまた、専門家に丸投げすることを要求することになってしまいます。

巨大システムになればなるほどそれが起きてしまうわけです。例えば、今度は放射能の除染などと言っています。素人ができるのは本当に限定的なわけです。だから、もしやるのであれば、また除染システムを専門家への丸投げという形になってしまうわけで、結局、どこまでいっても素人が社会参画できないという仕組みの中で問題が起きているのです。

それは、近代国家の国民国家は壊れているのと同じことで、国民国家が壊れていくのにも、結局、素人が参画できない形で管理されていく国家ができてしまった。ただ、それが年金制度や医療保険制度などで、いろいろ問題もあるけどまあまあ機能している間は良いのですが、またそれが無言の受益者集団に一員化されていって、それが破たんして、もう年金払いませんよとか、半分にしますよとかいう話が出てくると、被害者として言うしかない。そのときにどう言うかというと、「国はちゃんとした制度設計をしろ」と、こう言うわけです。つまり、また専門家に丸投げになるわけです。だから、絶えずそういう構造で展開していく。それが近代社会の一面だということが、今度のことを通して分かってきました。

情報量が増えても判断機能は高まらない

また、今回地震が起きて、かなり多くの人が取りあえずテレビをつけます。そしたら大津波警報があって、そのときには多分、見ている人の大半は高をくくっていたといいますか、ちょっと水位が上がるぐらいの気分でいたと。そうこうしているうちに、ドーッと来たわけです。多分その経過を、これは世界で初めてなんですけど、津波の全過程が動画で残るという結果を生んだのです。今までは、一部は少しあったのですが、本当に海が盛り上がって、ついに飲み込んでいくというのを、いろんなパターンで全部映してしまった。

私は次の日、大変苦労して成田に行った。飛行機の出発時間は完全に遅れたのですが、飛行機会社と交渉してこういう事態だから何とか次の飛行機に乗せてくれとか、何かできないかと思って行きましたら、飛行機も遅れておりました。それで、無事に乗って行ってしまったということです。

今回、フランスとベルギーとオランダに行ったのですが、文字が違うだけで、ほとんど日本の新聞になっていました。どの新聞も日本の津波のニュースばかりでした。だから、紙面の８割は日本のニュースという感じでした。ちなみに、津波は日本語が世界語になっていますから、どこに行ってもTSUNAMI（津波）なわけです。「へぇ」と思ったのは、ホテルのロビーにウォールストリートジャーナルというアメリカの株屋の元締めのような新聞がありますが、それが置いてあったので見たら、これもまた８割が日本の津波のニュースになっていました。それぐらい世界が仰天をしたということです。翌々日ぐらいからは原発が中心になって、もう本当に大変なことになったという感じでした。

向こうの一般の人たちは、日本がどんな形をしているかなどあまり分かっていないですから、日本そのものが終わったのではないかという感じに

なっていて、タクシーに乗れば、運転手さんに「日本は崩壊しちゃったんだってね」とか言われました。「そういうのだったら、今日は運賃いいよ」と言うのかと思うと、ちゃんともらっていく感じでしたが。しかしそれぐらいニュースが続きました。

そういう点では、世界中の人たちがあの津波ニュースを共有し、その後の原発の爆発の映像を共有してしまったという出来事だったのですが、ただ今回、政府はちゃんと情報を出していないのではないか。ましてや、マスコミはまともな情報を出していないのではないかという批判が随分あったのです。私は政府に関して言うと、まあまあちゃんと出していたという気がするのです。つまり、出せるものは出していたという感じといいますか、あの程度しかなかったという、むしろそういうふうに考えた方がいいということなのです。ただもちろん、配慮はあった。つまり、まだはっきり確認できない情報について未確認のままに出してしまって、パニックをあおるのはまずいのではないかということです。だから、それが完全に事実だと分かったら出そうと。ただ、はっきり確認できない未確認情報がたくさん入っているわけで、それについてはちょっと報道を控えておこうといったような配慮みたいなものは入りました。それが結果としては情報量を少なくしたということも言えるわけです。

本当だったら、そういうときには、未確認情報でも「未確認です」ということを断って出すべきなのです。それで判断を人々にゆだねるべきなので、すべて出してしまわなければいけない。「これは精度の低い情報ですけど、こういうのもあります」というのを出さなければいけないので、それを隠してしまうと不信感が広がってしまいます。そういう問題もあったのですが、大体どこの政府でも未確認情報だったら出しませんので、これからはそれをどう教訓化するかは別ですけれども、大体あんなもんでしょうという気がします。

その、「政府は情報の出し方が悪い、マスコミは情報の出し方が悪い」と言ったのですが、実は今回分かってきたことは、情報とは何のために必要なのかというと、情報を知ることによって判断するために必要なわけです。別に情報を知って、物知りになるために必要なわけではないですから。そうするとその情報の機能、つまり情報機能と言われるものは、その判断できるという部分に情報機能があるわけで、そのときに情報量を増やしたからといって、果たして判断機能が高まったでしょうかということなのです。

それは、さっき言った津波の映像をみんながテレビで見た。そうすると、動画映像というのは情報量がものすごく多いのです。あの津波が襲ってく

るのを、もしラジオでアナウンサーが実況中継したら、一生懸命しゃべっても全体の100分の1も伝えられないということに当然なります。その後、文字で新聞が一生懸命書いても、やはり同じことが起きるわけです。その点、写真となった瞬間に、情報量は飛躍的に上がるということです。さらにそれが動画になってくると、さらに飛躍的に上がってきて、本当に車が飲み込まれていくそのすべてまでが映っているわけですから、情報量としては桁違いに大きいものです。

最近はあまりやってないような気がしますが、私もたまにテレビに出ることがありますが、そうすると、いつも面白いなと思っていたのは、例えば新聞に原稿を書いて、誰かがたまたま目にした。そうすると、「あ、この間こんなこと書いていましたね」と、会ったときに言ってくれたりして、中身をちゃんと覚えていてくれるのです。たまにラジオをやることがあるわけです。そうすると、「この間、ラジオで偶然聞きました」と。やはり中身をそれなりに覚えている感じなのです。しかし、「テレビを見ました」は「テレビに出てましたね」で終わりなのです。それで、何を言っていたか全然向こうは覚えてないといいますか、別に、私も大したことを言っていないので覚えておかなくてもいいんですけど。つまり、情報量が増えていくと、逆に記憶してないという現象が起きるのです。むしろわずかな情報にしてくれると、そこをしっかり覚えるということが起きるのです。

だから、この間の津波のときの情報についても全くその現象が起きてしまって、みんなが食い入るようにテレビを見て、何が起きたのか判断ができなくなったというのです。さすがにあれだけ衝撃的な映像ですから、記憶には残ったんだけど、結局みんな、現実感を逆に失ってしまって、まるで映画の場面のような感じさえして、それで何をしたらいいのかよく分からなくなってしまった。だから、情報が本来与えなければいけない機能が、逆になくなってしまった。その上に、翌日からというか当日から、テレビを見続けると次々といろいろな情報が入ってくるわけです。そのことによって人々はちゃんと判断できたかというと、実は判断できないわけです。つまりこの問題とは、情報量が多いと、逆に人間たちは判断ができなくなるということを、さらけ出してしまったということなのです。

それで、一部では評判が悪かったけど枝野さんが官房長官で出てきては、例えば現在の放射線がどのぐらい出ているなどと言い、「直ちに健康には影響はありません」などと言って帰っていくということを繰り返していました。もちろんそれは、聞けば「直ちに健康に影響はない」ということは、将来はあるんですかと誰でも思うわけです。結局、枝野会見でもそうですが、何遍も出てきて言うわけです。そうすると、そこまでで言っていることは、我々の判断から落ちてしまうのです。人々の判断がどこだったかというと、その最後の部分、「直ちに健康には影響はありません」という部分を信じるか、信じないか、あるいは、それは取りあえず信じるけど、じゃあ将来は危ないんだなと考えるかです。つまり、この3つの部分しかなかったのです。もちろんそこにはシーベルトだのベクレルだの、あまり聞き慣れない単語が出てきたりしたということもありますけど、結局、その原発が爆発してどうなっていったという経緯をいくら説明してもらっても、判断にはつながらなかったのです。最後の「直ちに」というところを聞いて、逆に危ないんじゃないかとか、人のいい人は、政府が言っているから安全だとか、そういうふうに、そこの判断しか、みんなしていないのです。

だからその後で、当初出てきた、評判が悪かった原子力工学系の先生たちが安全だの何だのと一生懸命テレビで言う。だけどそのこと自体に対して人々は全く判断できないわけで、つまりこの人は信用できそうだとか、この人は信用できそうもないとか、その部分だけです。結局その判断も、前からの自分が持っている情報に基づいている場合が多くて、そもそもその原子力を推進してきたような人が言うことは怪しいに決まっているとか、そういうところで、この話は信用しない方がいいとか、そういうふうに考えただけの話といいますか。だからその話をじっと聞いて、その判断をした結果、この話は怪しいとか、いや、信用に足るとか、そういう形での判断はほとんど利いてないのです。

この問題から分かってきたことは、情報は多いからといって、判断能力を高めないということです。むしろ情報というものは、誰かがセレクトしたり、あるいは練り直したりして、ポイントだけを出してこないと情報にならないということが分かりました。だから、それを天気予報みたいなものと思えばいいのですが、気象庁にはたくさん情報が入っているはずなのです。あれを全部、そのまま裸で公開し続けた場合どうかというと、多分判断できなくなるのです。むしろ、そのときに気象庁の人が出てきて、例えば台風が来ているとしたら、大ざっぱな矢印か何かにしてくれて、50メーターぐらいの風が吹きそうだとか、300ミリぐらい雨が降りそうだとか、あれは完全に練り直しているわけです。そういう非常に大ざっぱな情報にしてくれると我々も判断が利いてきて、だったら、今日は早く帰った方がいいなとか、いろいろなことができてくるわけです。

刻々と変わっていくデータをすべて出したら、逆に我々はポカンとしていることになるのではないか。多分国会でもそうで、もしテレビを10チャンネルぐらい使って、国会の中の委員会から何まで全部生中継で映し続けるというのをやった場合、情報量は確かに多くなりますけど、それを見ている私たちは的確な判断ができるでしょうかというと、多分できないのです。むしろ、つまらないことだけ覚えていて、あの先生があくびしていたとか、そういうことだけを覚えているということになりかねない。そうすると政治情報も誰かが選び直したり練り直したりして、「これがポイントですよ」と伝えてくれないと、判断可能な情報にならないということになってしまうわけです。

ところがそういうことになると、当然ながらそこに情報操作が入るということで、それは仮に意図的でなくても、例えば私が選んだのです。それは、私が重要だと思うときに選ぶわけですから、もうその時点で既に情報操作なわけです。しかも、そこには意図的な操作もあり得るわけですから、これは全く困った問題です。誰かがセレクトしたり練り直して、初めて情報機能が出るとすると、これは正確な情報は伝わらないということになってしまいます。ただ、天気予報ぐらいだったら、それぐらいでいいわけです。しかも、外れてくれてもいいわけで、「50メートル風が吹くと言ったのが30メートルしか吹かなかった」と怒る人はいないわけですし、だからいいわけです。だけど、政治とか何とかのきわどい問題が起きてきたときにそれでは困ってしまうわけで、だから情報がちゃんと伝わらないと。じゃあ、もうどんどん垂れ流し的に出したら伝わるかというと、逆にその判断機能の方につながらないというのです。結局、どちらにしても情報は伝わらないということなのです。このことが分かってきました。つまり、人

間同士がきちっと伝え合っていったりするものは伝わるわけですけども、国単位などの大きな情報というものは結局伝わらない。

だから、そういうことになってくると、近代社会のその市民社会の原理も駄目だったということになるわけです。つまり、市民社会が発生してから、非常にリベラルな、この社会をもっと良くしていこうという人たちはどういうふうに言ったかというと、人物で言えば最近で言うとハーバーマスなどがそうです。ともかく行政というものはすべての情報を出しなさい。そうすれば、市民はそれを見て的確な判断をして、もちろん市民だって間違うことはあるけど、流れとしてはやっぱり最終的には的確な判断になっていくと。それで、そういうことを通しながら、政治というものをコントロールしながら、いい市民をつくっていくというのが楽観派の市民社会論だったわけです。ところが、ちゃんとした情報が伝わらないとするならば、この原理そのものがもう通用しないと言わなければいけません。結局、そこで「情報」と言っているものの限界があるということなのです。つまり、今、私たちが情報と言っているものは、情報が単体であるということです。だから、それが新聞を使って伝えられるか、テレビを使って伝えられるか、ツイッターだったとしても、どちらにしても情報というものがあって、それが伝えられていく。そして、伝わらなくなってしまう。そうではなくて、例えば人を通して伝わっていくときには物ではなくて、その人の人格や性格など、いろんなものも含めて伝えていくわけです。そういうものは結構伝わっていくといいますか、そうすると、あるつながりを持ったところでの情報というのは伝えられるけど、つながりを超えた一般情報になった瞬間に、伝えられないということがあり得るということが分かってきました。

そう思って振り返ってみると、例えば情報公開を要求した市民の活動はたくさんあるのです。「県もちゃんと出せ、市もちゃんと出せ」と、そこら中でいろいろな活動をやっています。その結果、今、十分かどうかは知りませんが、昔と比べればはるかに情報は出されているというふうに言ってもいいです。じゃあ、その情報活用されていますかというと、全然されてないのです。だから、「市は情報を公開せよ、県は情報を公開せよ」と言って頑張った人たちは、その結果、情報公開条例か何かができて、ある程度公開されるようになったら終わってしまった。つまり、本来の目的はそれを見て、それでより良い県や市をつくるために活動するということが目的だったはずなのですが、「情報公開条例をつくれ」というところで終わったのです。

それが、ただし外交文書などが公開されると、その筋の専門家たちがいますから、政治学者などがときどきそれを見て、「こういう事実が発見された」などと言っているわけです。私も情報公開はしなければいけないと思っているのですが、実はそれが活用されない情報公開になっているというのは、やはりこのあたりに問題があるというふうに言えます。だから、ここにまた今の社会の基本が間違っているのではないかということが出てくるわけです。つまり、あるものは国が管理し、あるものは県が管理し、あるものは市が管理し、その中で、人々は受益者だったり被害者だったりするといったような構造の中で情報とかいろいろなものが動いていってしまうと、結局駄目なんだと。そうではなくて、ちゃんとつながる単位を基にしながら社会をつくり直すということを、時間をかけてもいいからやらないと、結局うまくいかないんだということが分かったということです。

震災対応に見る社会変革への思い

私がヨーロッパで日本のニュースを見ていたときに、大変なことになっているというニュースとともに、時々、日本にいる特派員と、「電話連絡がつきました」「現地はどうなっていますか」というニュースが入るわけです。そうすると、例えばフランスなどの国の本部のキャスターが、「それで、どのぐらい暴動は起きていますか」と聞くわけです。そうすると、「いや、全く起きていません」「え、略奪などはないのですか」、「いや、全くないです」と言うのです。そういうニュースが時々あって、そのことはかなり人々をびっくりさせた。それが繰り返されたものだから、そのうち本国のキャスターたちも、「これがわが国で同じことが起きていたら、略奪で大変なことになっていただろう」と言うのです。若干泥棒はありましたけど、あれは通常の泥棒が「しめた」と言ったという感じで、私はそのレベルを超えてないだろうという気はするのです。だから、我々が急に泥棒になるという、そういうことは本当に起きなかったというふうに言ってもいいです。

そこに、「何か、日本人に固有の何かがあるんじゃないか」という意見もあって、10日ぐらいして帰ってきましたらメールがあって、オランダのラジオ局ですけども、「緊急にインタビューをしたいが、応じてもらえないか」というのです。それは時間切れのものですが、「今日か、遅くても明日中にしたい」などと書いてありました。ただ、その質問の第1項目が「なぜ日本人は、ここまで冷静で助け合っているのか」「何か、日本の思想や文化や何かにその秘密があるのだったら、それを教えてもらいたい」というものでした。それに答えるのは無理ですけれども、ただ、そういうことを言って、日本の人間たちも何か日本的な、助け合いの精神とかがあるように思っている人たちがいるのですが、私はそんなことはないと思っています。

なぜかというと、今から約90年近く前ですけど、関東大震災がありました。関東大震災のときにどうだったかというと、まさに略奪の渦になったわけです。そこら中で暴動が起きて、ついに政府は戒厳令を敷いたわけです。その上に、その略奪が宇都宮とかそういう所にまで飛び火しているわけです。つまり、地震であまり揺れてなかった所まで、略奪や行動が飛び火するという自体を起こしているわけです。

しかも、そのときに忘れてはいけないことは、一般の人による朝鮮人大虐殺が起きているということです。当時は井戸が飲料水ですから、朝鮮人が井戸に毒を入れようとしている。そういう流言飛語が飛び交って、しかも、それを読売新聞が報道してしまったということもあって、一気に、「やられる前にやれ」という話になって、朝鮮人狩りが始まった。そのときに、何人の朝鮮人が殺されたのかよく分からないのですが、直後に吉野作造という大正時代の代表的な、「大正デモクラシーの人」みたいな人ですけど、彼が調査をやっていて、その調査の結果だと、確か2,800何十人ぐらいです。当時、韓国は日本の支配下ですから、大韓民国臨時政府というのが上海にあったのです。その上海の大韓民国臨時政府の発表で、確か7,800人ぐらいではないかと思います。ただし、大韓民国臨時政府も調査能力を持っているわけではないですから、よく分からない。ただ、少ない方の吉野作造の説を取ったとしても、凄まじい虐殺をしたということだけは言えるわけです。例えば、日本人に追いかけられた朝鮮人が逃げ場を失って、警察署に逃げ込んだりしているわけです。下町のある警察署などでは、その

警察署を群衆が包囲して「引き渡せ」と言って、石を投げたりしたというのです。それに対して警察署長が出てきて、「おれが生きている間は引き渡さん」と言って頑張ったとか、後に美談になっていくのです。そっちを美談にするよりも、その引き渡せと言って行動を起こした人たちの方をちゃんと報じなければならないという気がします。

同じようなことが軍の駐屯地でも起きています。その軍の駐屯地に朝鮮人が逃げ込んで、そこを群衆が「引き渡せ」と言って包囲しました。それで、軍の方が逆に守るという事態が起きたりとか、そういうことが起きているわけです。

同時に、あのときには、一般民衆というよりも、後の満州国建国の中心になっていく甘粕大尉などがやっていくわけですけども、大杉栄を虐殺したりするとか、社会主義者狩りもやったわけですが、これは少し便乗したという感じがあるんですけど、ともかく、そんな状況だったわけです。

ある時に私は、大正時代の新聞のダイジェスト版みたいなものを手に入れました。今はマイクロフィルムで読めますが、昔はなかったので。それを見ていてびっくりしたのは、大正時代という大正デモクラシーが盛んだった時代に、当然ながら人殺しなどの凶悪事件がたまに起きるわけです。そうすると、新聞はどういうふうに報道しているかというと、「何月何日、どこで、こういうひどい事件が起きた」と書いてあるわけです。その最後の止めの文章が全部同じなのです。「このような凶悪犯罪を犯したということは、犯人は恐らく赤卑鮮人の類であろう」というのが、全部凶悪事件の止めの文章にありました。「赤卑」というのは、共産主義者や社会主義者を指す言葉です。「鮮人」は、言うまでもなく朝鮮人を指す言葉です。だから、当然のようにすべて最後に「犯人は、恐らく赤卑鮮人の類であろう」というのです。全く、新聞は何という報道をやっていたのかと驚いたことがありました。それが、戦前における日本が一番民主化した時代です。そのときに関東大震災が起き、大虐殺が起きていく。

だから、日本の人たちが一貫して奥ゆかしくて、助け合ってきたというのはうそですよというのです。むしろ、私が思うには、明治からの近代化によって日本は列強の仲間入り、大正時代ぐらいになると植民地を持ったりして、列強の仲間入りした気分になってきたと言っていい。しかし社会の内部はいろんなガタが来ている。そういう中で関東大震災が起きたときに、そういう現象を起こしたのだろうと思うのです。逆に、江戸時代に起きていれば、そんなことは起きなかっただろうという気がするわけです。

そういう時代を経過した日本の人たちが、今回はそんな行動を取ってない。それはなぜなのかというふうに考えなければいけないのです。むしろ、

私はこの間に、もう社会を変えなければいけないという思いと、それに基づく多少の行動というものが広がっていたからだ、と思うのです。それは、20年ぐらい前からバブルが崩壊して、若者の非正規雇用率が50%という事態を生んでいるわけです。そういう中で、特に若い人たちはそうですが、今までの生き方をなぞっていても、もう駄目ということが分かってきているのです。じゃあどういう生き方をしたらいいか。いろんな模索が進んでいるのです。だから今回でも、みんな本当に苦労してでもボランティアに行っているし、しかも継続的に行っています。

それで、今回も本当に驚いているのですが、私の関わっている一つのグループが行ったカンパ活動の話です。群馬県の片品村に、原発地域から1,000人ほど一時避難してきていまして、そこは民宿が多いので、どうぞうちに来てくださいという感じで受け入れたのですが。ところが、来たらやはり、体の悪い人などいろいろたくさんいて、ボランティア体制をしっかりやらなければいけなくなりました。村も小さいですから対応し切れない。それで地元の高校生や女性などが一生懸命頑張ってくれてボランティア組織をつくって、かなり頑張ってくれました。私たちはそこと多少は協力関係にあったので、ボランティア活動するにしてもお金だけは送らないと、何もないと大変ですし、場所は村ですから、そんなにお金が簡単に集まるわけではないのですが、緊急に仲間に呼び掛けて、寄付の呼び掛けをやってくれとやりました。そのとき、呼び掛けだと30人ぐらいの、そことかかわり合いがあったグループなので、2、30万円送れたらいいなという感じだったのですが、集まったお金が280万円でした。よく集まったなと思います。だから、もちろん30人だけでやったわけではなく、それがまた周りに呼び掛けてやったに違いないのですが、本当に感心しました。

それから、三陸との付き合いをずっとやってきている別のグループで、今は流されてしまった三陸の集落支援で、そこの地元の人たちが頑張っているので、その漁民の人たちにまずお金を渡して支援をする。そっちのグループはもう少し大きい、200人ほどの規模のグループです。そこのグループが集めたお金は、2,800万円です。ですから、皆さん気合いを入れて出してくれたな、という感じです。しかも、継続的にやっているのです。だから、お金も人も本当にみんな頑張って出していこうという、そういう雰囲気です。

コミュニティの時代へ新たなうねり明らか

結局それは、もう我々は、個人の社会からコミュニティの時代へと移らなければ駄目だ。結びつきの時代に移らなければ駄目なんだということで、そこへ向かう活動が始まっていたし、もう今までのように自分のことだけ考えて就職していても駄目なんだということも分かっていたし、資本主義は我々を守ってくれないということも分かっていたし、国も守ってくれないことも分かっていた。その中で、どういうふうに働いて、どういうふうに結び合っていったらいいのか。最終的な結論の姿は分からないけれども、とにかくやれるところからやろうという形で動いていたということなのです。

そういう中で、都市だけではなくて、むしろ農村や漁村など、そういう所が持っているような価値みたいなものに対する見直しも進んでいた。そ

ういうことが、実はじわじわと、特に行動できるような人たちの間ではしっかり広がっていたと思うのです。逆に、行動しない人たちの中では旧態依然たる発想が残っているのですが、こういうことが起きて動くような人たちの中では、もう都市の限界なんて分かっているし、資本主義の限界も分かっているし、人間が個人になったら駄目なんだということも分かっているという、そういうことがあったということなのです。

だから、私の周りでもいろいろな団体があるのですが、テーマは違うけれどもやっていることはみんな同じなわけで、どうやってコミュニティ的なものをつくるか、ローカルな世界をきちっとつくるか。それを基にしながら、日本の社会を変えていくかという方向でずっと動いてきたし、しかもそういうものがあったからこそ、そういう動きが始まったときに関西の地震があって、ボランティア時代のようなものをつくり上げたとも言える。今回だと、さらにレベルの高いボランティアになっているのですが、そういうことも踏まえながら、私たちの社会は前から若干変わってきていたんだというのです。そこをきちっと見る必要があります。だからこそ、関東大震災ではなかったと言ってもいいし、関東大震災のときにあったような、変な大国意識もなかったし、もう、私たちは「大国」とかいう言葉に踊らなくなっていたといいますか、そういう時代でもあったと。

支援をしている人たちの気持ちというのは、単なる支援ではありません。そういう中で、これから大変なんだけれども、多分継続的な支援をしながら、我々の社会を変えるんだという方向できているという感じなのです。だから、この動きというものは、私は確実だという感じがしていて、どういう姿になるのかは知らないし、誰も言えません。でも、もう変えるうねりだけは確実に、私は生まれてきているというふうに思っています。だから、その点では本当に大変だなという気持ちはあるけれども、絶望感というものは全くなくて、むしろ、やれそうだという気分というのが出てきているのが今でもあります。特に知らんぷりできない、関東や南東北などに行ってしまうと、これはもうやらなければいけないし、やれるよという雰囲気が結構あるし、動くような人たちの間ではそれが広がっていて、決して悪い雰囲気ではない、そういうことでもあります。

かなり話が長くなってしまいましたが、取りあえずこれで終わります。

どうも本当に長い時間、ご清聴ありがとうございました。

参加者からの質問

（司会者）

内山先生、ありがとうございました。

最後、明るい話でまとめていただきました。事前にお約束をした時間が近付いていますが、せっかくの機会ですので、お一人だけ質問を受け付けたいと思います。

（参加者）

幾つかあります。

9.19の「脱原発6万人集会」をどういうふうに思われているかということが1つ。

それから情報の問題で、ちょっと受け止め方が違うのですが、やはり私としてはすべてを出してほしい。そこで取捨選択ではなくて、判断するのはあくまで市民であるということだろうと思うのです。伝わらないのではなくて、受け止められない状況がこちらにあるということであって、情報はやはりすべて出さなければならないのではないかというふうに考えています。

だから、枝野さんのあの発言なんかも、どうしょうもないような発言だったと考えています。それと、基準500ベクレルとか、あれはあくまで都合のいい、安全という基準ではないので、100ミリシーベルトを250に上げたとかいろいろあるんですけれど、やはりそういうところはきっちり出していただいて、判断はこちらでしたいという思いがあります。

それと、これほどまでの被害、福島の人たちの生業を否定するような形の被害がありながら、なぜ原発推進派がまだ、野田総理を含めて、推進しようとするのか。そこらへんのところをどういうふうに考えておられるのかなというふうに思います。

それと、一番思うのが、ここにいる人たちは労働組合の人が多いのですが、最近、やっと連合の会長が「脱原発」という発言をしましたけれど、労働組合が、電気連合をはじめ電力総連、東電の労働組合も含めて、こういう取り返しのつかない状況の中であってもなお、あるいは原発が被ばく労働を前提として、それで放射性廃棄物の管理ができない状況でありながら、推進しようという論理のところに持っていくのか。そこのところを、どう受け止めたらいいのかなということ。

最後ですけれど、関東大震災の問題がありますが、やはり報道されないだけではないのか。阪神大震災の後に、あそこでどのくらいのレイプがあったかということをある新聞で読みました。今回、そのことについては一切報道されていません。しかし、時々漏れてきます。だから、報道されないだけであって、助け合いの社会の変化というのがまだまだあるのかどうか。私たち労働組合、あるいは市民が、絆や「がんばろう、日本」という国家の論理ではなくて、労働者や市民の論理としてつながるような働き掛けがなぜできないのか。そういうことを考えるのですが、そこらへんどういうふうにお考えいただくのか。少しお聞かせ願いたいです。

（内山氏）

あまり多かったので、記憶から薄れていってしまいますけど。

最初に 6 万人集会。もちろん、いろいろな形で声を挙げていくのはいいのですが、多分、あそこに行かなかったけれども、いろいろな形で反原発、脱原発の具体的な行動を始めている人たちが、恐らくその 100 倍はいると思っていい。

じゃあ、その人たちがなぜ 1 カ所に集まってこないのかというと、もちろん、私はその大きなデモをやったりするということを全く否定もしていないし、そういういろんなことはあった方がいいなと思っているのですが、やはり 1960 年安保とか 70 年闘争とかいろいろのものを経ながらつかんだ一つの教訓は、中央で決着させるみたいな形では決着がつかないのだということが分かったこと。それでも声を挙げるというのは正しいのですけれども。

つまり、フランスやドイツなどでもそうなのですが、市民の力か労働者の力を一つに結集してというのが、ほとんど機能してないと思うのです。そのことをもう一度どう考えるかということが必要で、だけど、やってはいけないと言っているわけではなくて、いろいろな形でやらなければいけないけれども、それだけに頼れないということにはなってきている。それが、実際にはみんなが集まれば 600 万人ぐらい集まってもいいぐらいなのに、行かない人の方が多いということをつくっているのだと思うのです。

しかし、その行かない人たちは何もしてないわけではなくて、実はいろんな所で、今はボランティアもしていれば、自分の周りでその原発の勉強会もやっているし、脱原発に向かって自然エネルギーをどうするかなど、いろいろなことをやっているわけです。いろいろなことをやっているんだけど、ああいう形で結集していく場所に行かないということです。だから、そこのところに今の運動の多様性があるんだということを見ておかないといけないのだろうと。

だから、僕はもちろん、随分頑張ったものだとは思うけど、今の運動というのはそれがすべてではないということは、やはりちゃんと見ておく必要があると思っています。

情報については、ちゃんと伝わらなかったらしくて、私もすべての情報を出せと言っているのです。それは「未確認情報でも出せ」とさっき言ったわけです。そうなんだけども、「情報を出せば判断できるというのは幻想だ」と言っているのです。それはどうなるかというと、出された情報を今度は内輪の専門家に分けてもらうことになるわけです。

だから、例えば労働組合だったら、たくさん情報を出されてきたら、労働組合のどこかがその中の重要な部分を機関紙で伝える。そこで判断する。どうしてもそうなってしまうわけです。つまり、たくさん出てきた情報によって、市民の側がどう判断するかと言うのは、情報を隠さないという問題とは別問題なのです。私は持っているものはすべて出すべきだし、仮に未確認でも出すべきだと。特にこういう危機のときにはです。だけれど、それを出していれば何とかなるという幻想からは、もうちょっと自由にならなければいけない。だから、それはもっと違う仕組みを考えないといけないというのです。

そういうことですから、さっき言った「情報が多ければ、市民が適切な判断をする」というのは幻想なんだとむしろ割り切って、「じゃあ、違う形

でどうしたら情報がちゃんと伝えられるのか」ということを検討し直さないとうまくいかないということなのです。

原発推進派といっても、もちろんそれは推進したい人はいますから、それは最後は一人になったって、やりたい人はいるでしょうということなのですが、少なくとも、例えば東京周辺の雰囲気を見ている限り、原発問題については、私はもう決着済みと判断しています。つまり、脱原発で決着済みだと。ただ、その脱原発に向かって、どのぐらい時間をかけるかについて争っている。だから、「即刻やめてください」という人たちから、「ちょっと、経過措置として20年ぐらい考えてください」と言っているような人たちまで含めて、そのへんの幅があるということだけであって、最終的に原発を、「もうこれは続けられませんね」ということについては、もちろん抵抗している人はいますが、ほぼ何か雰囲気として決着がついてきたと思っています。

だから今の争いは2つになっていて、むしろ3つと言った方がいいでしょうか。1つは、「時間をかけて脱原発にさせてください」という人たちです。もちろん、その人たちは「分かりました。じゃあ、20年かけていいです」と言うと、18年目ぐらいには「やっぱりやりましょう」と言うかもしれませんけれども。取りあえず、今はそういう勢力がある。もう1つは、これは今の東京電力や電力会社、あるいは電力総連の最大の課題ですけれども、発電と送電の分離だけは阻止するというのです。だからもう、電力総連などでも発電と送電の分離のところをやられなければ、原発はあきらめてもいいというぐらいの感じになってきています。つまり、あれが自分たちの資金源ですから、そうなってきています。無論、人によってそうは言わない人もいますが、実はそこらへんに移っているという感じなのです。3つめは、「発電と送電の分離だけは困ります」という、この勢力はもちろん巨大にある。もう1つは、「日本でつくらないのはいいけど、輸出をやらせてもらいたい」という勢力。だから、この3つが今課題になっていて、そういう方向にも移ってきているというふうに思っています。

だから、推進派そのものはもちろんいますけど、もう、大きな力になることは無理だという感じがしています。関連して、はっきり言えば、連合がおとといぐらいに、取りあえず脱原発を言ったというのは、私から見ると完全に遅きに失したと思っています。というのは、雰囲気として決着済みの問題を今ごろ言ったって、全然インパクトがありません。4月ごろに言っていれば、電力総連を除名してでも脱原発だと言ったとかいうのだったらインパクトがありますけれども、今ごろ言ってもね、という感じがあります。

ただやはり逆に言えば、労働組合の方には申し訳ないですが、今ごろになってだけれども、あの愚鈍な連合が脱原発を言ったと。これはもう決着済みの証拠である、という気持ちを私は持っています。もちろん、それは今から巻き返されるかもしれません。だけど、今の雰囲気はもうかなりそういうところにいっています。ただ、だから危険な面はあるから、それはやはり注意して見なければいけないことは間違いないです。さっき言ったように、20年かけて停止などとやっていたら、15年目から巻き返される可能性がありますから。そういうことで、やることはまだたくさんありますけども、むしろ、私は今の人々がもう決断している。その気持ちをうまく拾い上げながら動かしていくという、そっちの戦略を練っていかないとい

けないのではないかというふうに思っています。

最後の、報道されていない点がある、ということについては、いつのときでもあるのです。それで、私はそれを誇大に言うことには反対なのです。

例えば、原発事故で無人になった所に、確かに泥棒が行ったわけです。そのときにも、それをかなり誇大に言う人たちがいて、「いや、そういうような人はたくさんいますよ」という話になりましたが、結局気が付いてみたら、まあ、泥棒さんが少し駆け付けた人がいたようだ、というレベルを超えてないということが分かってきました。

それで、今回でも被災地でレイプがあったとの話はあるのですが、それは、いくらかはあるでしょう。それは、あってほしくはないけれども、本当に絶望の極致になっている人はたくさんいるわけです。つまり、家族全員死んでいる人や、いろいろな人がいるし、ボランティアで行った人だって、実はいろいろな人たちがいるわけです。そうすると、その中で良からぬことが多少起きるということは、それはもう仕方がないという一面でもあるといいますか、だけど、それに対して少なくとも付和雷同で生きている人たちはいないし、それから、そういうことが起きたときには、「ちょっと、これはないように工夫しよう」という、むしろそういう形でみんな動いています。

そのときに、そういういろいろな事件が起きるということを強調するよりも、それを広がらせないように人々がやっている工夫の方を、きちっと見るべきだと思っています。残念ながらそれは、1,000 人がピンチの状態になれば、1 件ぐらい起きますよというのです。それから、ボランティアが 1,000 人集まれば、ちょっと考え違いのボランティアも 1 人ぐらいはいるということは、残念ながらあるのです。だけど、それが 1 人ではなく 300 人になって、500 人になっていくということは全くありませんでした。むしろ、ちょっとそれらしいことが起きた所などでも、適切にその対策が打たれている。しかも、自分たち自身で対策を打っています。そういうこともあるので、私はむしろそっちの、本当によくやっている方をきちっと見ないといけないなと思っているということです。

（司会者）

まだまだあるかと思いますが、かなり時間もたちましたので、本日のセミナーは以上で終わりたいと思います。

再度、内山先生に全体の拍手でお礼としたいと思います。

ありがとうございました。